

讃岐香川の様々な文化発展を応援します。

# 文化通

2001  
春

3月1日発行(季刊)



撮影／藤井照芳 協力／ティクワン

## はばたけ「讃岐のふたりっ子」

今年5月にCDのリリースを予定しているROCOCO（ロ・コ・コ）のお二人は高松市池田町在住の双子の姉妹。プロデビューを目前にしての練習は狭いスタジオを熱くする程の真剣さで、今後の活躍が本当に楽しみです。

特集 あ・うんの数寄講座 第1回【樂茶碗の世界】樂吉左衛門

特別寄稿 茶会と道具 谷松屋 一玄庵 戸田 博

好評連載 美藻庵点描／Oh! 茶Gal／喫茶居

3月から5月までの茶華道・イベント情報を掲載

## 「あ・うんの数寄講座」

日本文化のエッセンスを探る連続セミナー  
平成十二年九月二三日 午後二時～

第一回は樂吉左衛門氏を迎えて

### 【樂茶碗の世界】長次郎から受け継ぐこと、いま私が創ること

長次郎を祖として、樂家は四百年以上にわたり、茶の湯の器だけをつくりつけてきました。具体的な技術や造形においては一切の伝書もなく、自らの経験と感覚によって、自分の力だけで切り拓いていく。そういうかたちで、樂家では伝統の継承と創造が行われてきたということです。

いまこの時代に生きる樂さんにとって、長次郎とはどのような存在なのか、また、伝統の継承とご自身の作陶とはどのような距離にあるのか、お話を伺いたいと思います。(齋藤裕氏の挨拶より抜粋)



樂 吉左衛門  
(らく・きちざえもん)  
陶芸家  
樂家十五代当主  
樂美術館館長

「いつものだとつくづく思います。私が長次郎と本当の意味で出会ったのは、昭和六十三(一九八八)年、ちょうど長次郎が亡くなつて四百年というときです。その四百年忌の展覧会に際して、長次郎の茶碗を約五十碗ほど展示しました。おそらく、それだけの長次郎茶碗が一堂に並んだことはそれまでになかったでしょう。そのとき、皆さんが高い見まわすと、五十碗並んだなかの数碗に、どうしても自分の足が止まってしまうものがある。じつと見てみると、生々しい感動といるのか、自分の体の内から感動が湧き起こってくる、そういう瞬間があります。でも、そのときの感動の質というのを考えているのか、楽しんでいるのか、そういうことを教えてくれる」と、お話しします。そこがまず、ものの始まりではないでしょうか。だから、「数寄」をテーマにしたこの講演会の意味というのも、やはりそういうところにあるのだと思います。

私は樂という家に生まれて、初代の長次郎とは幼少の頃から一緒に過ごしてきたという思いがします。うちには「面影」と「勾当」という長次郎茶碗があり、折に触れては小さいときから慣れ親しんでいたのですが、ものとの出会いというのは、單に目の前で「こんにちわ」「さようなら」ということではない、もっと深いところで出会わなければ結局は忘れてしまうし、自分がどういうことを教えてくれる。自分がどういうことをつねに自分に向かって止まつてみる。そして、なぜそれが好きなのかといふことをつねに自分に向かって問うてみると、そうしたら、きっと茶碗が何かを教えてくれる。自分がどういうことを

の支部があつたのですが、そこにはイタリア人以外にもさまざまな国の人々、芸術家たちが集まつていました。神父もいたし、建築家や音楽家もいました。そういう

人と「お茶」というのは音楽ですね。これはパロックです」と、言います。どういうことかと思って聞いていると、「茶筅のこする音がする、ときには外の音も聞こえてくるし、いろいろな音が聞こえてくるなかで、釜の音がつねにジーッと鳴つて。釜の音はパロック音楽の通奏低音ですね」と。なるほど、そういう見方もあるのかと思いました。一方で建築家は「と、やはり場所の配分、ものの大きさ、縦と横と深さの寸法のなかでのものの位置、そういうことに大変感動していました。まさに、寸法というのはそういうことでしょ。皆さんもお茶をなさるときに、大きな風炉釜の横に大きな水指を持つてきて、さらに大きな茶碗を置けば、ばさけてしまつと考えられるでしょう。やはり大きなものがあつたら、その大きさを引き締める小さなものがあり、さらにその間をとりもつ中ぐらいの大きさがあつて、もののバランスと調和、対比ということを考えながら取り合せをなさいますね。

では、長次郎茶碗の寸法というのも、やはりそういうことなのだろうか。いや、そりではなくて、利休の茶の湯における茶碗の小ささといふのは、精神の小ささといふではなくて、利休の茶の湯における茶碗の小ささといふのは、精神の縮こまつて小さいとあります。それは精神が縮こまつて小さいと、その意味ではなくて、小さくあろうとする方向のなかに、自分の精神のあり方が置

### 「侘びる」という心の寸法

よく若い人に、「樂茶碗」というのはよくわからないんですが、どうしたらいいんでしょうか」と聞かれるんです。そこで、「好きなものを一つだけ見つけなさい。それは長次郎でもいいし、三代の道入でもいいし、あるいは樂茶碗でなくて志野の茶碗でもいいんですよ」と、いつも答えます。「好き」ということが、やはりいちばん大切なことだと思います。もう一つ、「これが好きだ」と思つたあと、ちょっと立ち止まつてみる。そして、なぜそれが好きなのかといふことをつねに自分に向かって問うてみると、そうしたら、きっと茶碗が何かを教えてくれる。自分がどういうことを

実はイタリアにいたときに、初めてお茶の稽古をしてみる気になりました。裏千家

かれている。長次郎茶碗というのははつねに小さくあろうとしている。これ以上小さくあつては、もう茶碗ではないぐらいに小さく引き締めている。そこで寸法とは、ほかとのあんばいを測るバランスということではなくて、みずから精神の方向、それが「侘びる」という一つの心のあり方なのではないかと私は考え続けています。おそらく皆さんは、侘び茶とか侘びといふのは美意識と思つておられるかも知れない。私もそう思つてきました。でも、たぶんそれは美意識といふものではなく、侘びるという心のあり方のなかでとらえられる寸法のことではないかと私は考えていました。

## 利休と長次郎の求めたもの

たとえば、「無一物」。これは本当にひずみのない茶碗です。無作為と言つてしまえばそれですむような気もするんですが、でも私は無作為という言葉は使いたくない。少なくとも現代に生きるわれわれが使うべき言葉ではないと自分のために肝に銘じていて、できる限り無作為とは言わないようしています。

それから、装飾というものもない。(中略)

聚楽土という赤土で樂茶碗はつくるのですが、赤茶碗はその赤土が火の中でほんのりと色づいていった色です。たとえば、南宋の青磁「馬蝗絆」といった硬質でデリケートな中国の美しい焼物とくらべをつっている。これは、赤茶碗の赤といふのは、色ではなくて、土色の茶碗、赤土を露わにした茶碗だと私は思うんです。

土というのは当時のごく一般的な素材であつて、土の粗末でみずぼらしい世界を、むしろ違つたものにする素材がかなりあつたにもかかわらず、利休は土を主張した。それは、まさに利休の建てた待庵の茶席と通じている。待庵の壁は、しかも土壁をきれいに仕上げてしまわないで、すなほの混じつた荒壁のまま残している。利休はそれと同じような土の性質、土の触覚、土そのものを茶碗の中に主張した。それが、あの赤樂の茶碗ではないかという気がします。装飾性というものを、まったくそこから排除している。否定している形の面白さといったことも捨ててしまつてある。実は、さらに徹底していることがあります。(中略) 茶碗を拝見するときも作法になつていて、正面や見込みを見たあとに、裏を返して高台を見ます。たいてい高台は土見せになつていて釉がかかつてない。ザンギリした土もあれば、固く焼き締まつたものもある。そこに土のいろいろな表情が現われて、さらにそれが水の中に浸かれば、しつとりとした潤いと柔らかさがでてくる。剥きだしですから籠の勢い、強さといったものをじかに感じることができます。



## 美藻庵点描 三、 点前座

茶席において、亭主が点茶を行う場を言い、茶道口に連続して炉置との関係位置にある所で、炉の構え方によって点前座の位置が定められるものである。点前座の置を「点前置」と言い、茶道具を置く場所であることから「道具置」とも言う。また、「客置」に対して「亭主置」、または「居置」とも言う。この置は絶対に横に敷くことは無く、茶席の形式によつて、丸置や台目置がある。美藻庵の点前座は、台目置に出爐の形を取り、赤松皮付丸太の中柱を設けることで、客置と点前置の領域を分けている。

いう時代の息吹、強さ、美しさといったものを、利休は一つ一つを削ぎ落として、果ては全部消し去つてしまつた。一体これが何なのだろうか。その答えを、私はまだ見つけることができないです。しかし、利休は、焼物を見るのにこんなに楽しみのある場所を塗り込んでしまつた。どうしてそこまで徹底して否定し、捨て去つてしまわねばならなかつたのかと思うんです。

「本来無一物の境地」などと簡単に言わぬでほしい。それですまさないでほしい。それでわかつた気にならないでほしい。ようやく人々が戦争から自分を取り戻して、生き生きと表現し始めた桃山と先に長次郎は何を求めていたのか。それが、やはり問題となつてくる。自分は答えを見つけていないと言いましたが、でもその方向だというのはわかります。でも、すぐそつちへ行けるかというと、やはりそうは行けない自分がいる。自分にとつてものをつくる始まりがあるのだと思うんです。

(講演より抜粋)

# 特別寄稿

## 茶会と道具

平成十二年九月二十四日に美藻庵・晴松亭で行われた「あ・うんの数寄講座」連動茶会についてご紹介した前号の記事中におきまして、筆者の妹尾氏より要望されました道具組の披露につきまして、席主の一玄庵戸田博氏よりご寄稿頂きましたので紹介させて頂きます。なお、戸田氏には財団の四月月釜で、今度は地元の若い茶人達と共に楽しい茶会を企画しております。詳細は未定ですが、楽しみにお待ち下さい。

時の経つのは早いもので、中條文化振興財団の御依頼を受け、晴松亭と美藻庵にて、樂吉左衛門氏との茶会を催して半年近く、汗をふきふき席主を務めさせて頂いたのがピンとこないこの冬の寒さでした。

津へ下るに際して、現在の茨木街道ぞいの村々の刊煎百姓宛に出した伝符状あります。常慶はこの伝符状を持つてこの街道の村々を通って会津まで出向い

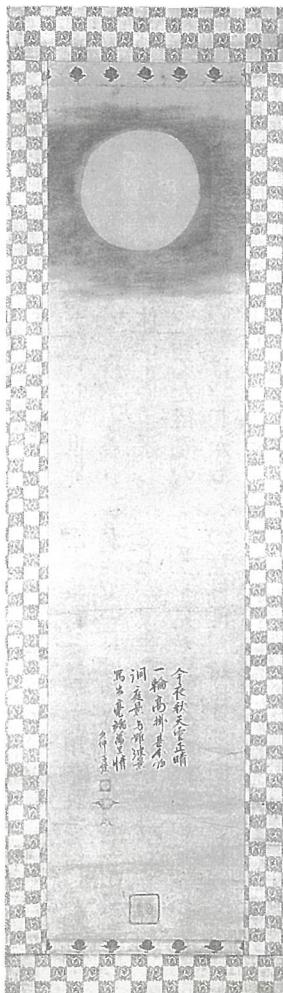
かな風合いに仕上げる事に成功しています。  
そして茶碗は、黒楽 銘・  
黒木 如心斎箱  
二代常慶造で、皆様にお茶をお立てした訳です。この茶碗は

明らかに利休が好んだ初代長次郎の作風とは著しく異なり、慶長年間始め頃より流行する茶碗の器形と類似しているものであります。これは利休没後の茶の湯の動向を推察する事が出来る、興味深い一碗であると思ひます。



通常の大寄せ茶会は、濃茶・薄茶に分かれ、席主が、それぞれの思惑と趣向によつて名品を持ち出しての大茶会となる訳ですが、その方法では展観茶会の色が濃くなり、茶味やその茶会の本質が見失なわれていく傾向があります。そこで今回は平素より同好の士として、親しく交友のある樂さんと一緒に席を持つ事に成りましたので、濃茶・薄茶を心合わせてひとつのテーマの元に、取り合わせをする事にしました。テーマは樂美術館の館蔵品を中心にその歴史の流れを感じ取る、取り合わせを考える事にしました。

先ず寄付きの床には、町野長門守より常慶宛に出された伝符状を掛けました。吉左衛門・常慶が、蒲生氏郷を見舞いに会



松花堂筆 月の絵 江月賛（藤田家伝来）—撮影 城野誠治

床には、圓鑑国師墨蹟（遠州藏張）を掛け、花生として、綠釉二彩 鶴首 三代道入造（赤星家伝来）を用いました。本来、鶴首の様な器形の花生は、輻轂製作の物が多いのですが、道入は手捏ねの作方によりおつとりした柔ら

以上のような濃茶の取り合わせの流れを受け、薄茶では濃茶で表す事の出来なかつた季節感を意識した取り合わせを考えた訳です。

本席床に掛けた、松花堂筆 月の絵 江月賛（藤田家伝来）は画面上方に大きな満月が浮かびあがり、江月が画面の下方に贊を記しているという、通常とは反対（普通は押贊と言い、贊が上方で絵が下方にある）の構図となっているのです。上方

茶・薄茶に分かれ、席主が、

たのです。

扱、濃茶・本席

床には、圓鑑国師墨蹟

やその茶会の本質が見失なわれていく傾

向があります。そこで今回は平素より同

好の士として、親しく交友のある樂さん

と一緒に席を持つ事に成りましたので、濃

茶・薄茶を心合わせてひとつのテーマの

元に、取り合わせをする事にしました。テ

史の流れを感じ取る、取り合わせを考える事にしました。

先ず寄付きの床には、町野長門守より

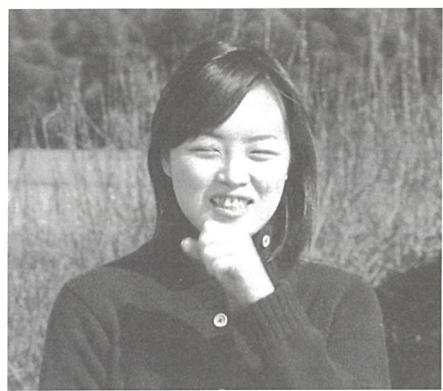
常慶宛に出された伝符状を掛けました。吉

左衛門・常慶が、蒲生氏郷を見舞いに会

濃茶席		会記	
香合	床	席主	樂美術館 樂吉左衛門
火箸	羽簾	付	常慶宛
簍	炭斗	記	町長門守傳符
鐵	唐物菜籠	時代桐蒔絵錫縁	時代桐蒔絵錫縁
新羅青銅	新羅青銅	時代藤組透	時代藤組透
南蛮カメ蓋	南蛮カメ蓋	徳元造	徳元造
新羅青銅	新羅青銅	宗和好	志野
火箸	手付	手付	独樂
簍	荒目	席	圓鑑國師墨蹟 趙州行脚 定上座 遠州藏帳
鐵	圓鑑阿陀形	付	圓鑑阿陀形 赤星家伝来 三代道入造
新羅青銅	鶴首	記	鶴首二彩 鶴首 六閑蒔箱 鴻池家伝来 与次郎造
南蛮カメ蓋	黒樂 銘黒木	時代	黒樂 銘黒木 元時代古裂
新羅青銅	如心斎箱	時代	如心斎箱 二代常慶造
火箸	土眉四方	時代	土眉四方 荒目
簍	轆轤造	時代	轆轤造
鐵	志野	時代	志野
新羅青銅	新羅青銅	時代	新羅青銅
南蛮カメ蓋	南蛮カメ蓋	時代	南蛮カメ蓋
新羅青銅	新羅青銅	時代	新羅青銅
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
南蛮カメ蓋	手付	徳元造	徳元造
新羅青銅	手付	徳元造	徳元造
火箸	手付	徳元造	徳元造
簍	手付	徳元造	徳元造
鐵	手付		

# Oh! 茶Gai!

その⑦



「もう8年習っているんですけど、楽しくって」と言う前田まゆみさん。学生時代は英語が好きで大学も英語科に進学した彼女。その一方、お茶に初めて出会ったのは小学生の頃、その後、教室に通い始めて今の先生に出会ったことで、より深く興味が湧いてきたそうです。年に数回あるお茶会は習ったことを実践できる格好の機会と、とても楽しみにしているとか。他にもキーボードを習っていたり、スキーのシーズンになるとウキウキしたり、おとなしそうな彼女ですが、実は積極的な性格みたいです。

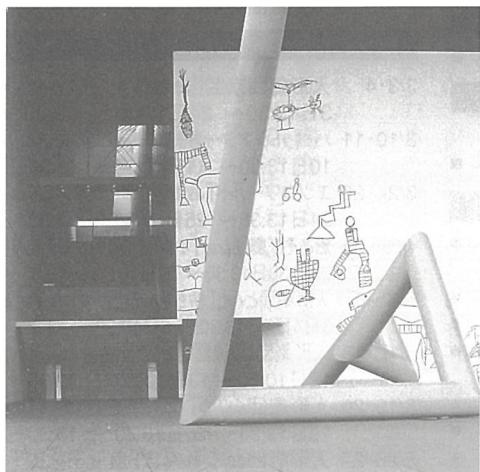
最近熱中しているのが美味しいモノの食べ歩き。休みの日に話題のうどん屋さんや行列のできるお店を探し歩くのが楽しみだそうです。初めてお茶をいただいた時、「このお茶とお菓子、とっても美味しい」と思つたそうで、これがお茶を好きになつたきっかけだったのかも知れません。

## 喫茶居(七)

### 「雨の喫茶店」

外は雨。お城の石垣を見ながら雨で色を滲ませた信号を右折すると、程なく、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館。大きなおもちゃ箱みたいな美術館は玄関広場からカラフルな造形展示が始まり、楽しさを予告します。

石段を昇りつめた屋上は高いコンクリート壁に囲まれた不思議な空間。視界から遠景の一切を排した風景は四角く切り取った空ばかりで、壁面を利用した滝の水音(雨に緩衝された音はいさかかトーンダウン)だけが響きます。水の流れる単調な連続音を聞いていると周囲の静寂が一層強調されて、まるで禅の世界。風で吹き込む雨をよけて、隣



接したガラス貼りの喫茶室に入りました。水音はさらに小さくなりましたが、絶えることなく続く音の源(滝)眺めながら、熱いポットの紅茶をミルクでいただきました。

外は雨。お城の石垣を見ながら雨で色を滲ませた信号を右折すると、程なく、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館。大きなおもちゃ箱みたいな美術館は玄関広場からカラフルな造形展示が始まり、楽しさを予告します。

石段を昇りつめた屋上は高いコンクリート壁に囲まれた不思議な空間。視界から遠景の一切を排した風景は四角く切り取った空ばかりで、壁面を利用した滝の水音(雨に緩衝された音はいさかかトーンダウン)だけが響きます。

いつの日かどちらかの席で、お目に掛かれる日の為に…。

谷松屋 一玄庵 戸田 博

(右頁より続く)  
の満月の絵と、下方の贊との距離がかな  
り離れて記す事により、秋天の高さが表  
現されているのです。

### 左衛門造の茶碗として、当代 樂吉

左衛門造の茶碗を取り合わせましたが、その茶碗は一緒に取り合わせた、桃山時代の道具と自然に受け合い、その質の高さを感じさせる場面を作りだしていました。樂さんが造り出す茶碗は、一見古来の樂茶碗とは大きな隔たりがある様に見えるかも知れませんが、その内在した本質はまさに、初代長次郎の作品の内底深く潜む本質と同じであると感じるのは、私だけでは無いと思います。以上、数点の道具を御案内致しましたが、私自信不勉強で浅学の為、十分にそれぞれの道具の魅力をお伝えできなかつた事を申し訳無く思つております。

最後に成りましたが、何時もこの様な茶会で改めて思いますことは、言い尽くされた事かも知れませんが、人がもつ五感の大切さであります。多くの人が茶席に入つた瞬間、花の美しさに心を奪われ、立ち込める香の薰りに感激し、釜の湯の煮えたぎる音に心を和ませる、つまり五感を研ぎ澄まし、直感で全てを受け止め事が出来る自分を確認する事。古来より伝來した、茶道具の名品も当然重要な存在である訳ですが、一方この様な精神面をも自分自身考える必然性を感じます。

とき 平成十三年四月二十一日(土)  
主席 一玄庵主  
(財) 官休庵青年部香川支部  
石原恵泉先生

### ◇四月月釜

「あ・うんの数寄講座」連動茶会で、樂吉左衛門氏と釜をかけて下さり、本号にもご寄稿いたしました「玄庵主戸田博氏が、春たけなわの四月、若人と共に釜を懸けて下さる事になりました。テーマは? 趣向は? と今から楽しみです。詳細は決まり次第、ご案内させていただきます。

とき 平成十三年四月二十一日(土)  
主席 一玄庵主  
(財) 官休庵青年部香川支部  
石原恵泉先生

### 行事予定(三月～五月)

#### ◆三月月釜「お雛祭り」

皆様にはそれぞれ雛祭りの忘れられた思い出があると思いますが、その思い出のひとつになればと、当財團月釜もお雛祭りをテーマに煎茶席でお楽しめ頂きます。

とき 平成十三年三月三日(土)

主席 三癸亭賣茶流

すべて予約制(時間指定)となります  
お申し込み、お問合せは、  
当財團事務局まで  
☎ (087) 826・3355  
FAX(087) 826・2212

# イベントガイド

香川県文化会館 ☎(087) 831-1806

- ~3/4 第36回日本墨彩画院展 9:00~■
- 3/16・17 一生本流いけばな展 前期 9:00~●
- 3/19・20 一生本流いけばな展 後期 9:00~●
- 3/23~25 第20回現代書展 9:00~■
- 3/28~4/1 油絵アコンズ30周年記念展 9:00~■
- 4/4~8 第24回土筆書展 9:00~■
- 4/18~22 第11回莞耿社四国支部展  
書朋会 9:00~■
- 4/25~5/6 第40回日本現代工芸美術展 9:00~●
- 5/26~6/10 第66回香川県美術展覧会  
前期 9:00~●

香川県県民ホール ☎(087) 823-3131

- 3/20・24 第3回スプリングコンサート 13:30~■
- 5/8 宝塚歌劇花組公演 14:00~・18:00~●

玉藻公園管理事務所 ☎(087) 851-1521

- 3/11 裏千家淡交会
- 3/17~21 第20回趣味の古木展
- 3/18 第23回新樹川柳大会
- 3/24・25 香川の漆器まつり
- 4/15 茶会 石州流香川県支部
- 5/26 菊作り講習会
- 5/27 第15回子ども文庫まつり

高松市教育委員会 ☎(087) 839-2636

- 3/4 第23回高松市音楽協会「春の音楽祭」  
高松市民会館 13:00~■
- 3/16 デリバリアーツ 韓国舞踊  
女木小学校 13:00~■
- 高松市ふれあい福祉センター 18:30~■
- 3/17 デリバリアーツ 韩国舞踊  
直島町総合福祉センター 12:30~■
- 庵治町民会館 18:30~■
- 3/27 パブリックアート高松探検  
香川県庁 13:30~■

高松市美術館 ☎(087) 823-1711

- 3/9~25 高松市美術館コレクション展 9:00~●
- 13年度予定 ニューヨーク・ブルックリン美術館所蔵  
印象派展 フランス—アメリカ●

菊池寛記念館 ☎(087) 861-4502

- 3/3 文芸講座「歌ごころ男と女」13:30~■
- 高松市歴史資料館 ☎(087) 861-4520
- 4/21~5/27 歴史資料館新収蔵品展 9:00~●
- 高松市図書館 ☎(087) 861-4501
- なかよしかみしばい(紙芝居)  
3/3・4/7・5/5 14:00~■
- おはなしのかけはし(手遊び・お話等)  
3/10・4/14・5/12 14:00~■
- にこにこおはなしひろば(絵本読み聞せ等)  
3/14・4/11・5/9 15:00~■
- 伝々虫のおはなし会(手遊び・昔話等)  
3/24・4/28・5/26 14:00~■

- 3/10 レッツエンジョイ英語のおはなし 14:00~■
- 3/24 郷土文化サロン  
「さぬきの古代・中世の光景」14:00~■
- 4/24~5/12 子ども読書週間記念行事作品展 9:30~■

高松市立市民会館 ☎(087) 839-2888

- 3/1 Dir en greyコンサート 18:00~●
- 3/11 映画「十五才学校IV」  
10:00~・13:00~●
- 3/25 第56回島田バレエ学校発表会 9:30~■

オリースホール ☎(087) 861-0467

- 3/24・25 ドラゴンアッシュライブ
- 3/31 Air ライブ
- 三越 ☎(087) 825-0784**
- 3/20~25 山下清展 10:00~●
- 4/3~8 イタリアフェア 10:00~■
- 5/15~20 相田みつを展 10:00~■
- 5/29~6/3 第21回日本の料理展 10:00~■

ギャラリー四季 ☎(087) 822-9010

- 3/1~31 野崎義之 四国の名木「桜」写真展 7:30~■
- 4/1~30 山本弘文 写真展「スイスを訪ねて」7:30~■
- 5/1~30 浜野光洋 ちぎり絵・水彩画展 7:30~■

石の民俗資料館 ☎(087) 845-8484

- 3/17~30 さぬき石物語・牟礼・庵治石工の技 9:00~■

丸亀市文化協会 ☎(0877) 24-8826

- 5/18~20 第34回丸亀市民展覧会  
丸亀市民会館他 9:00~■

丸亀市民会館 ☎(0877) 23-4141

- 3/9 第7回かがわ演歌まつり 14:00~・18:30~●
- 3/26 第19回丸亀高校吹奏樂部  
定期演奏会 17:30~■
- 4/7 伊東ゆかりコンサートツアーアー2001 18:30~●
- 4/13 スターダストレビューコンサート 18:30~●
- 4/29 島田創作舞踊研究所  
丸亀合同発表会 13:00~★
- 5/13 坂本冬美コンサート 14:00~・18:00~●
- 5/18 丸亀お城まつり前夜祭 18:00~★

丸亀市中央公民館 ☎(0877) 24-1392

- 3/17~18 公民館まつり 生涯学習センター 9:00~■

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 ☎(0877) 24-7755

- 3/3~5/27 ヤン・ファーブル展 10:00~●

坂出市民ホール ☎(0877) 45-1505

- 3/4 親と子の市民映画祭
- 3/11 アマチュアバンドコンサート
- 5/20 カッパ座人形劇公演

観音寺市民会館 ☎(0875) 23-3939

- 3/4 観音寺・三豊地区大正琴演奏会
- 3/10 「ドラエモンのび太と翼の勇者たち」上映
- 3/11 三豊民謡発表会
- 3/18 第20回生涯学習子どもフェスティバル
- 3/28 「ドラエモンのび太と翼の勇者たち」上映
- 3/29 朝日ファミリー劇場・ぬいぐるみ人形劇
- 4/28 「クレヨンしんちゃん嵐を呼ぶ」上映
- 4/29 第4回観音寺市民吹奏樂団定期演奏会
- 5/6 「名探偵コナン天国へのカウントダウン」上映

善通寺市教育委員会 ☎(0877) 63-6328

- 3/15~18 赤羽刀展 善通寺市美術館 10:00~■
- 5/5 獅子舞大会 讃岐宮 10:00~■

多度津町中央公民館 ☎(0877) 33-0760

- 4/22 多度津芸能音楽祭 町民会館 10:00~■

多度津町民会館 ☎(0877) 33-3330

- 4/29 カワイ音楽コンクール 9:00~■

仁尾町文化協会 ☎(0875) 82-2143

- 3/4 町外招待囲碁大会 仁尾町公民館 9:00~▲

志度音楽ホール ☎(087) 894-1000

- 3/24 ウィーン・グリステン演奏会 19:00~●

飯山町教育委員会 ☎(0877) 98-7961

- 3/5~17 手作り作品展 庁舎分館 8:30~■
- 4/16~26 春の俳句展 庁舎分館 8:30~■
- 5/7~17 油絵展 庁舎分館 8:30~■
- 5/12 芸術祭 総合運動公園 18:00~■
- 5/12~13 生花展 総合運動公園 8:30~■
- 5/21~31 木彫り展 庁舎分館 8:30~■

三木町教育委員会 ☎(087) 891-3314

- 3/25 平成12年度文化財公開講座  
三木町文化交流プラザ 13:30~■

直島町教育委員会 ☎(087) 892-2882

- 5/20 直島町芸能大会  
直島町福祉センター 12:00~■

とらまる座 ☎(0879) 25-0400

- 3/3~4 人形劇団京芸「おれはママじゃない」  
3日13:30~ 24日10:30~・13:30~●
- 3/10~11 パペットシアターおまけ「へっこいじいさん」  
10日13:30~ 11日10:30~・13:30~●
- 3/24~25 エツコワールド「おおきくなったネズミくん」  
24日13:30~ 25日10:30~・13:30~●
- 4/28~30 影あそび劇団ショイホナ「まあいオモチャ箱」  
28日30日13:30~ 29日10:30~・13:30~●
- 5/3~6 人形劇団とんと「耕ちゃんのたがやしまショウ」  
3日4日5月13:30~ 6日10:30~・13:30~●
- 5/12~13 人形劇団ぱんび「ちょっと、ききみみずきん」  
12日10:30~ 13日10:30~・13:30~●
- 5/19~20 人形劇団ぐぐつ「なしとりきょうだい」  
19日13:30~ 20日10:30~・13:30~●
- 5/26~27 人形劇団かくれんぼ「鬼っ子太郎」  
26日13:30~ 27日10:30~・13:30~●

灸まん美術館 ☎(0877) 75-3000

- 3/3~6 あかね保育園児作品展 9:00~■
- 3/9~13 黒川豊子と和み会 染織展 9:00~■
- 3/15~20 第5回 モアの会展 9:00~■
- 3/23~4/3 たなかあつし 木彫り展 9:00~■
- 4/6~10 湯浅益生とグループ「ゆう」作陶展 9:00~■
- 4/13~17 三原剛 写真展 9:00~■
- 4/20~24 火窯会展 9:00~■
- 4/27~5/8 香西洋子 押し花展 9:00~■
- 5/11~15 森岡潔嗣 陶展 9:00~■
- 5/18~22 城彩絵画同好会展 9:00~■
- 5/25~29 金森豊子 書道展 9:00~■

あーとらんど ギャラリー ☎(0877) 24-0927

- \* 絵画コーナー
- ~3/30 常設展 10:00~■
- 3/31~4/22 木村和熙展 10:00~■
- 4/28~5/20 谷本重義の丸亀十景展 10:00~■
- 5/26~6/17 片桐飛鳥 写真展 10:00~■
- \* 工芸コーナー
- 3/1~25 茶道具展 10:00~■
- 4/14~29 槻きよひで作陶展 10:00~■
- 5/3~16 現代の工芸9人展 10:00~■
- 5/19~6/10 浅原千代治グループ  
吹きガラス展 10:00~■

美翠Bisui ☎(0877) 23-6350

- ~3/7 丸亀美翠がもとめる日本の美 そのI  
「日本の折形」展 10:00~■
- 3/9~18 丸亀美翠がすぐる  
「ちょっと小粋な春の贈りもの展」  
10:00~■
- 3/20~4/5 丸亀美翠がもとめる日本の美 そのII  
「梅づくし展」 10:00~■
- 4/17~4/22 丸亀美翠がもとめる日本の美  
「香と香炉展」 10:00~■

「文化通心」第30号は6月1日発行です。

次の期間(6月1日から8月末日)の情報を5月10日までにお知らせ下さい。

TEL (087) 826-3355 FAX (087) 826-2212

# 茶道ガイド

表千家同門会香川県支部 ☎(087)874-0458

3/11 栗林公園月釜 捩月亭 9:00~ ●  
5/13 四季茶会 本覚寺 9:00~ ●

裏千家淡交会高松支部 ☎(087)865-7150

3/4 月釜 席主:岡崎宗暉 天神会館 9:00~ ●  
4/1 月釜 席主:大高宗青 天神会館 9:00~ ●  
5/6 月釜 席主:井上宗修 天神会館 9:00~ ●  
5/13 栗林公園月釜 席主:阿河宗美 10:00~ ●

武者小路千家 香川官休会 ☎(087)851-2258

3/4 月釜 席主:千原 康 本覚寺 ●  
4/1 月釜 席主:溝渕保子 本覚寺 ●  
5/6 月釜 席主:松寿会 本覚寺 ●  
5/13 香川官休大会 披雲閣 ●

仁尾町文化協会 ☎(0875)82-2143

4月上旬 観桜茶会 仁尾町福祉会館 13:00~ ●

華道家元池坊香川県連合支部 ☎(0877)22-7203

4/21・22 全四国池坊華道展 高松国際ホテル 9:00~ ●  
財小原流高松支部 ☎(087)833-9274

5/12・13 小原流東かがわいけばな展 三本松四国新聞東讃支社 10:00~ ■

一茶流 久松会 ☎(087)885-2322

5/12・13 一茶庵 いけばな展 丸亀町レツツ 9:00~ ■

セントラルホールウイング ☎(087)833-0005

3/18~20 草月流草月会 いけばな展 10:00~ ■

武者小路千家官休庵 佐々木博子社中 ☎(087)821-8777

3/4 第7回香川大学学生金 中條文化振興財団 9:00~ ●

●は有料、■は無料、▲は参加料、★は整理券が必要です。（記号表示は判明したもののみ）

上記予定は変更する場合もあります。

## 友の会（晴友亭）第IV期のご案内

当財団は、讃岐・香川の地が豊かで限りなく息づいている「ふるさと」であることを願うものです。

文化にも幅広いジャンルがあります。いろいろな文化を楽しめている方々、また楽しみたいと思っている方々、そんな仲間を募っています。

【対象期間】平成13年4月1日～平成14年3月31日

【年会費】3,000円

### 【特典】

- 当財団情報機関紙「文化通心」年4回発行の郵送
- 当財団関連の催し物のご案内
- 年1～2回の友の会交流会の実施

※申込み方法など詳しいことは当財団事務局までお問い合わせ下さい。

## イベント情報の収集にご協力下さい。

財団では、季刊でお届けしております『文化通心』の茶華道・イベントガイドについてより充実した内容とするためご協力下さる方を募集しております。県内で行われる茶華道関連その他のイベントの情報を寄せ下さい。

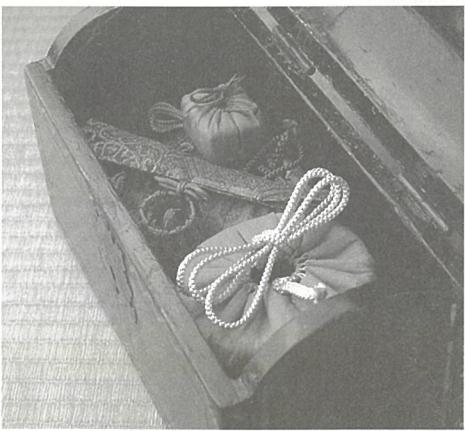
### ■情報の内容

- ①イベントのタイトル
- ②日時
- ③場所
- ④主催者名(団体)及び問合せ先の電話番号
- ⑤料金(参加料・入場料等)

掲載についての許可を頂く作業については、財団で責任を持って行います。もちろん情報源についても明かすることは致しませんので、ぜひ協力をお願い申し上げます。

ご協力頂けます方には所定の原稿用紙を用意させて頂きますので、財団事務局までご連絡下さい。

茶道具の製と袋物講座  
思い入れの製やお好みの布で、手づくりの贅沢をお楽しみになりませんか。  
出島紗や数寄屋袋等自分で作れたらとお考えの方々に絶好のチャンス



永井百合子先生プロフィール  
東京表参道にアトリエを構え、袋物教室を開講。美術館所蔵品の仕覆制作や花結びの指導。NHKテレビ「おしゃれ工房」に出演。談交社「なごみ」に執筆される等多方面でご活躍です。

時	平成十三年三月二十日(火)	講師	未知草会主宰 永井百合子先生	祭日
参加費	五千円	受講料		
人数	十名で〆切りといたします。	表・裏布地持参可		
材料費		実費		

財団事務所まで三月十七日迄にお申込下さい。

冬は激寒の猪苗代湖にこもり、白鳥写真を撮り続けた岩本俊雄カメラマンの作品を集めた展示室が高松、生島町に今年一月七日にオープンした。

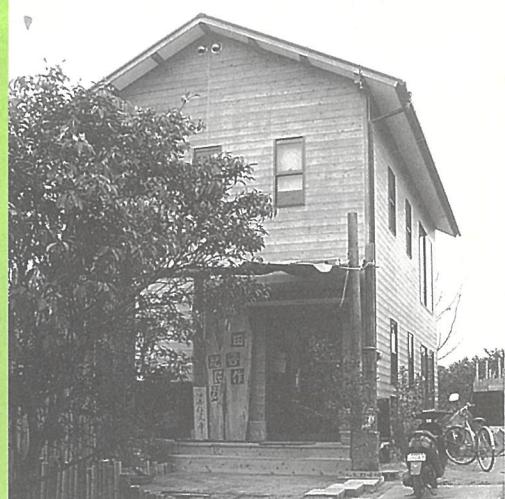
白鳥の夫婦は一生添い遂げる。そんな深い愛情に魅せられ、白鳥を撮り続けた岩本さんは、一九九〇年秋にガンを宣告された後も、翌年四月に亡くなる直前まで白鳥を撮り続けた。二十四歳の若さだつた。

展示室を開設したのは、生島町在住の平木美千代さん。地元で写真サークルに参加していた平木さんが岩本さんの写真



## 自然と命の大切さを伝えたい

岩本俊雄「白鳥写真展示室」



に出会ったのは三年前。参考にと軽い気持ちで開いたその写真集に深い感銘を受けたという。その後、彼のことを知れば知るほど、思い入れは深くなり、地元の公民館で写真展を開催。しかし思いはどどまらず、「この感動をもつとみんなに伝えたい」そんな気持ちが私財を投じての開設に至つたそうだ。館内には約四十点の写真がゆつたりと並べられており、厳しい寒さの中で撮られたはずの写真はどれも暖かく、白鳥に対する愛情がひしひしと伝わってくる。

「彼が命をかけて伝えたかったことを、これらの写真の前に立つことで、少しだけ」と語る田子作村。

### ●お問い合わせ

田子作村 高松市生島町326  
電話 087-8882-0496

もわかつてもらえれば」と言う平木さん。二階は私設公民館「肥民館」になつており、子供から大人、お年寄りまでみんなで「心を耕しやわらかい心を作ろう」と、ご主人と一緒に田子作村を主催している。「こんな時代だから、みんなで色々なコトを共有できる場があつてもいいんじゃないですか」という平木さんの心には羽が生えてるのかも知れません。



ことしの冬の長期予報は暖冬傾向。予報どおり年初の何日間は予報的中。だがその後は異常なほどの寒冷と豪雪。日本列島は寒さに震えた。

森進一

は「春に咲く花よりも北風に吹かれて咲く山茶花の花が好き」と歌つた。その山茶花に統いて蝋梅が、寒さなどなんでもないよう穏やかで優しい姿を見せてくれた。

そういえばこの花、以前は市中では余り見かけることがなかつたせいもあってかこの花の可憐さ優美さ、それにも増して周辺の環境や条件がどんなに苛酷であつてもじつと耐えて自らを主張して止まない凛としたところを愛する人が多いのだろうか、見かけることが多くなつたようだ。

好むと好まざるにかかわらず、嫌なことを見聞きすることが多い。それだけに、寒風に敢然と咲く山茶花。寒さの中でも毅然と生きる蝋梅。こうして生き方を学ぶことが多い。

もうすぐ「こぶし」「玉欄」、やがて桜も満開になるだろう。

自然は、大声を出さないがしつかと私たちに生きていく勇気を与えてくれる。春はもうすぐだ。

〔声・情報お寄せください〕

〒760-0017 高松市番町二丁目一一一二

(財)中條文化振興財団編集部

T E L (087) 826-3355  
F A X (087) 826-2212

## 編集後記